

# ある崖上の感情

梶井基次郎





# ある崖上の感情



## 1

ある蒸暑い夏の宵のことであつた。山ノ手の町のとあるカフェで二人の青年が話をしていた。話の様子では彼等は別に友達というのではなさそうであつた。銀座などとちがって、狭い山ノ手のカフェでは、孤独な客が他所よそのテーブルを眺めたりしながら時を費すことはそう自由ではない。そんな不自由さが——そして狭さから来る親

しさが、彼らを互いに近づけることが多い。彼等もどうやらそうした二人らしいのであった。

一人の青年はビールの酔いを肩先にあらわしながら、コップの尻でよごれた卓子にかまわず肱ひじを立てて、先程から殆ど一人で喋しゃべっていた。漆喰しっくいの土間の隅には古ぼけたビクターの蓄音器が据えてあって、磨すり減ったダンスレコードが暑苦しく鳴っていた。

「元来僕はね、一度友達に凶星を指されたことがあるんだが、放浪、家をなさないという質たちに生まれついているらしいんです。その友達というのは手相を見る男で、そ

れも西洋流の手相を見る男で、僕の手相を見たとき、君の手にはソロモンの十字架がある。それは一生家を持たない手相だと云ったんです。僕は別に手相などを信じないんだが、そのときはそう云われたことでぎくつとしましたよ。とても悲しくてね——」

その青年の顔には僅かの時間感傷の色が酔いの下にあられて見えた。彼はビールを一と飲みするとまた言葉を ついで、

「その崖がけの上へ一人で立って、開いている窓を一つ一つ見ていると、僕は何時いつでもそのことを憶おもい出すんです。

僕一人が世間に住みつく根を失って浮草のように流れている。そして何時もそんな崖の上に立って人の窓ばかりを眺めていなければならぬ。すっかりこれが僕の運命だ。そんなことが思えて来るのです。——しかし、それよりも僕はこんなことが云いたいんです。つまり窓の眺めというものには、元来人をそんな思いに駆る或るものがあるんじゃないか。誰でもふとそんな気持ちに誘われるんじゃないか、と云うのですが、どうです、あなたはそうしたことをお考えにはならないですか」

もう一人の青年は別に酔っているようでもなかつた。



彼は相手の今までの話を、そう面白がってもしないが、そうかと云って全然興味がなくもないといった穏やかな表情で耳を傾けていた。彼は相手に自分の意見を促されてしばらく考えていたが、

「さあ……僕には寧ろ<sup>むし</sup>反対の気持になった経験しか憶い出せない。しかしあなたの気持は僕にはわからなくはありません。反対の気持になった経験というのは、窓のなかにいる人間を見ていてその人達がなにかはかない運命を持ってこの浮世に生きている。というふうに見えたという事なんです」

「そうだ。それは大いにそうだ。いや、それが本当かも知れん。僕もそんなことを感じていたような気がする」  
酔った方の男はひどく相手の云ったことに感心したような語調で残っていたビールを一息に飲んでしまった。

「そうだ。それであなともなかなか窓の大家だ。いや、僕はね、実際窓というものが好きで堪たまらないんですよ。自分のいるところから何時も人の窓が見られたらどんなに楽しいだろうと、何時もそう思ってるんです。そして僕の方でも窓を開けておいて、誰かの眼にいつも僕自身を曝さららしているのがまたとても楽しいんです。こんなに

酒を飲むにしても、どこか川つぷちのレストランみたい  
なところで、橋の上からだとか向こう岸からだとか見て  
いる人があって飲んでいるのならどんなに楽しいでしょ  
う。『いかにあわれと思うらん』僕には片言のような詩  
しか口に出て来ないが、実際いつもそんな気持になるん  
です」

「なるほど、なんだかそれは楽しそうですね。しかし  
何という閑のどかな趣味だろう」

「あっはっは。いや、僕はさっきその崖の上から僕の  
部屋の窓が見えると云ったでしょう。僕の窓は崖の近く

にあつて、僕の部屋からはもう崖ばかりしか見えないんです。僕はよくそこから崖路を通る人を注意しているんですが、元来めつたに人の通らない路で、通る人があつたつて、全く僕みたいにしてそこでながい間町を見ていると、いふような人は決してありません。実際僕みたいな男はよくよくの閑人ひまじんなんだ」

「ちよつと君。そのレコード止よしてくれない」聴き手の方の青年はウエイトレスがまたかけはじめた「キャラバン」の方を向いてそう云つた。「僕はあのジャッツといふ奴が大嫌いなんだ。厭いやだと思ひ出すととても堪らない」

黙ってウエイトレスは蓄音器をとめた。彼女は断髪をして薄い夏の洋装をしていた。しかしそれには少しもフレッシュなところがなかった。寧ろ南京鼠ナンキンねずみの匂いでもしそうな汚きたないエキゾテイシズムが感じられた。そしてそれはそのカフェがその近所に多く住んでいる下等な西洋人のよく出入りするという噂を、少し陰気に裏書していた。

「おい。百合ちゃん。百合ちゃん。生をもう二つ」

話し手の方の青年は馴染なじみのウエイトレスをぶっきら棒な客から救ってやるというような表情で、彼女の方を振

り返った。そして直ぐ、

「いや、ところがね、僕が窓を見る趣味にはあまり人に云えない欲望があるんです。それはまあ一般に云えば人の秘密を盗み見るといふ魅力なんです。僕のはもう一つ進んで人のベッドシーンが見たい、結局はそういふことに帰着するんじゃないかと思われるような特殊な執着があるらしいんです。いや、そんなものをほんとうに見たことなんぞはありませんがね」

「それはそうかもしれない。高架線を通る省線電車にはよくそういふたマニヤの人が乗っているということですよ

よ」

「そうですかね。そんな一つの病型タイプがあるんですかね。それは驚いた。……あなたは窓というものにそんな興味をお持ちになったことはありませんか。一度でも」

その青年の顔は相手の顔をじっと見詰めて返答を待っていた。

「僕がそんなマニヤのことを云う以上僕にも多かれ少なかれそんな知識があると思っていいでしょう」

その青年の顔には僅かばかりの不快の影が通り過ぎたが、そう答えて彼はまた平気な顔になった。

「そうだ。いや、僕はね、崖の上からそんな興味で見る一つの窓があるんですよ。しかしほんとうに見たということとは一度もないんです。でも実際よく瞞だまされる、あれには。あっはっははは……僕が一体どんな状態でそれに耽ふけっているか一度話してみましようか。僕はながい間じいっと眼を放さずにその窓を見ているのです。するとあんまり一生懸命になるもんだから足許あしもとが変に便りなくなつて来る。ふらふらつとして実際崖から落つこちそうな気持になる。はっは。それくらいになると僕はもう半分夢を見ているような気持です。すると変なことには、そん



なとき僕の耳には崖路を歩いて来る人の足音がきまっただようにして来るんです。でも僕はよし人がほんとうに通ってもそれはかまわないことにしている。しかしその足音は僕の背後へそうっと忍び寄って来て、そこでぴたりと止まってしまふんです。それが妄想もうそつというものでしょうね。僕にはその忍び寄った人間が僕の秘密を知っているように思えてならない。そして今にも襟髪えりがみを掴つかむか、今にも崖から突落すか、そんな恐怖で息も止まりそうになっっているんです。しかし僕はやっぱり窓から眼を離さない。そりやそんなときはもうどうなってもいいという

ような気持ですね。また一方ではそれが大抵は僕の気のせいだということとは百も承知で、そんな度胸もきめるんです。しかしやっぱり百に一つ若しもやほんとうの人間ではないかという気が何時でもする。変なものですね。あつはつはは」

話し手の男は自分の話に昂奮こうふんを持ちながらも、今度は自嘲じちよう的なそして悪魔的といえるかも知れない挑いどんだ表情を眼に浮かべながら、相手の顔を見ていた。

「どうです。そんな話は。——僕は今はもう実際に人のベッドシーンをみるということよりも、そんな自分の状

態の方がずっと魅惑的になって来ているんです。何故なぜと云って、自分の見ている薄暗い窓のなかで、自分の思っているようなものでは多分ないことが、僕にはもう薄うすわかっているんです。それでいて心を集めてそこを見ているとありありそう思えて来る。そのときの心の状態がなんとも言えない恍惚こうこうなんです。一体そんなことがあるものですかね。あっはっはは。どうです、今から一緒にそこへ行つて見る気はありませんか」

「それはどちらでもいいが、だんだん話が佳境には入つて来ましたね」

そして聴き手の青年はまたビールを呼んだ。

「いや、佳境には入って来たというのはほんとうなんですよ。僕はだんだん佳境には入って来たんだ。何故って、僕には最初窓がただなにかしら面白いものであったに過ぎないんだ。それがだんだん人の秘密を見るという気持ちが意識されて来た。そうでしょう。すると次は秘密のなかでもベッドシーンの秘密に興味を持ち出した。ところが、見たと思ったそれがどうやらちがうものらしくなってきた。しかしそのときの恍惚状態そのものが、結局すべてであるということがわかって来た。そうでしょう。

いや、君、実際その恍惚状態がすべてなんですよ。あつはっはは。空の空なる恍惚万歳だ。この愉快な人生にプロジットしよう」

その青年には大分酔が発して来ていた。そのプロジットに応じなかった相手のコップへ荒々しく自分のコップを打ちつけて、彼は新らしいコップを一気に飲み乾した。

彼等がそんな話をしていたとき、扉をあけて二人の西洋人がは入って来た。彼等のは入って来ると同時にウエイトレスの方へ色っぽい眼つきを送りながら青年達の横のテーブルへ坐った。彼等の眼は一度でも青年達の方を

見るのでもなければ、お互いに見交わすというのでもなく、絶えず笑顔を作つて女の方へ向いていた。

「ポーリンさんにシマノフさん、いらつしやい」

ウエイトレスの顔は彼等を迎える大仰な表情でにわか  
に生き生きし出した。そしてきやつきやつと笑いながら  
何か喋り合つていたが、彼女の使う言葉はある自由さを  
持った西洋人の日本語で、それを彼女が喋るとき青年達  
を給仕していたときとはまるでちがった変な魅力が生じ  
た。

「僕は一度こんな小説を読んだことがある」

聴き手であつた方の青年が、新らしい客の持つて来た空気から、話をまたもとへ戻した。

「それは、ある日本人が欧羅巴<sup>ヨーロッパ</sup>へ旅行に出かけるんです。英国、仏蘭西<sup>フランス</sup>、独逸<sup>ドイツ</sup>と随分ながいごつたごたした旅行を続けておしまいにウィーンへやって来る。そして着いた夜あるホテルへ泊るんですが、夜中にふと眼をさましてそれから直ぐ寐<sup>ね</sup>つけしないで、深夜の闇のなかに旅情を感じながら窓の外を眺めるんです。空は美しい星空で、その下にウィーンの市が眠っている。その男はしばらくその夜景に眺め耽<sup>ふけ</sup>っていたが、彼はふと闇のなかにたつ

た一つ開け放された窓を見つける。その部屋のなかには白い布のような塊りが明るい燈火に照らし出されていて、なにか白い煙みたようなものがそこから細く真直ぐに立騰のぼっている。そしてそれがだんだんはつきりして来るんですが、思いがけなくその男がそこに見出いだしたものはベッドの上に肆ほしな裸体を投げ出している男女だったのです。白いシーツのように見えていたのがそれで、静かに立ち騰っている煙は男がベッドで燻くゆらしている葉巻の煙なんです。その男はそのときどんなことを思ったかと云うと、これはいかにも古都ウィーンだ、そしてい



ま自分は長い旅の末にやっとその古い都へやって来たのだ——そういう気持がしみじみと湧いたわというのです」

「そして？」

「そして静かに窓をしめてまた自分のベッドへ帰って寝たというのですが——これは随分まえに読んだ小説だけれど、変に忘れられないところがあつて僕の記憶にひっかかっている」

「いいなあ西洋人は。僕はウィーンへ行きたくなくなった。あつはつは。それより今から僕と一緒に崖の方まで行かないですか。ええ」

酔った青年はある熱心さで相手を誘っていた。しかし片方はただ笑うだけでその話には乗らなかつた。

## 2

生島（これは酔っていた方の青年）はその夜晩く自分の間借している崖下の家へ帰って来た。彼は戸を開けるとき、それが習慣のなんとも云えない憂鬱を感じた。それは彼がその家の寝ている主婦を思い出すからであった。生島はその四十を過ぎた寡婦である「小母さん」と

なんの愛情もない身体の関係が続けていた。子もなく夫にも死別れたその女にはどことなく諦あきららめた静けさがある。そんな関係が生じたあとでも別に前と変わらない冷淡さもしくは親切さで彼を遇していた。生島には自分の愛情のなさを彼女に偽る必要など少しもなかった。彼が「小母さん」を呼んで寢床を共にする。そのあとで彼女は直ぐ自分の寢床へ帰ってゆくのである。生島はその当初自分等のそんな関係に淡々とした安易を感じていった。ところが間もなく彼はだんだん堪らない嫌けんお悪を感じ出した。それは彼が安易を見出していると同じ原因が彼

に反逆するのであった。彼が彼女の膚に触れているとき、そこにはなんの感動もなく、いつも或る白じらしい気持が消えなかった。生理的な終結はあっても、空想の満足がなかった。そのことはだんだん重苦しく彼の心にのしかかって来た。そのうちに彼は晴ればれとした往来へ出ても、自分に萎しなびた古手拭のような匂しが沁しみみているような気がしてならなくなった。顔貌かんぼうにもなんだかいやな線があらわれて来て、誰の目にも彼の陥っている地獄が感づかれそうな不安が絶えずつき纏まとった。そして女の諦めしげきのような平気さが極端にいらいらした嫌悪を刺戟するの

だった。しかしその憤懣ふんまんが「小母さん」のどこへ向けられるべきだろう。彼が今日にも出てゆくと云っても彼女が一言の不平も唱えないことはわかりきったことであった。それでは何故出てゆかないのか。生島はその年の春ある大学を出てまだ就職する口がなく、国へは奔走中と云ってその日その日を全く無気力な倦怠けんたいで送っている人間であった。彼はもう縦のものを横にするにも、魅入られたような意志のなさを感じていた。彼が何々をしようと思うことは脳細胞の意志を刺戟しない部分を通じて抜けてゆくのがらしかった。結局彼は何時まで経っても其処そこ

が動けないのである。――

主婦はもう寝ていた。生島はみしみし階段をきしらせながら自分の部屋へ帰った。そして硝子窓ガラスをあけて、むっとするようにもった宵の空気を涼しい夜気と換えた。彼はじっと坐ったまま崖の方を見ていた。崖の路は暗くてただ一つ電柱についている燈がそのありかを示しているに過ぎなかった。そこを眺めながら、彼は今夜カフェで話し合った青年のことを思い出していた。自分が何度誘っても其処へ行こうとは云わなかったことや、それから自分が執しつこく紙と鉛筆で崖路の地図を書いて教え

たことや、その男の頑かたくなに拒んでいる態度にもかかわ  
らず、彼にも自分と同じような欲望があるにちがいない  
となぜか固く信じたことや——そんなことを思い出しな  
がら彼の眼は不知不識しらずしらず、若しやという期待で白い人影を  
その闇のなかに探しているのであった。

彼の心はまた、彼がその崖の上から見るあの窓のこと  
を考え耽ふけった。彼がそのなかに見る半ば夢想のそして半  
ば現実の男女の姿態が如何いかに情熱的で性慾的であるか。  
またそれに見入っている彼自身が如何に情熱を覚え性慾  
を覚えるか。窓のなかの二人はまるで彼の呼吸を呼吸し

ているようであり、彼はまた二人の呼吸を呼吸しているようである、そのときの恍惚とした心の陶酔を思い出していた。

「それに比べて」と彼は考え続けた。

「俺が彼女に対しているときはどうであろう。俺はまるで悪い暗示にかかってしまったように白じらとなってしまう。崖の上の陶酔のたとえ十分の一でも、なぜ彼女に對するとき帰って来ないのか。俺は俺のそうしたもの窓のなかへ吸いとられているのではなかろうか。そういう形式でしか性慾に耽ることが出来なくなっているの



はなかるうか。それとも彼女という対象がそもそも自分には間違った形式なのだろうか」

「しかし俺にはまだ一つの空想が残っている。そして残っているのはただ一つその空想があるばかりだ」

机の上の電燈のスタンドへは何時の間にかたくさん虫が集まって来ていた。それを見ると生島は鎖をひいて電燈を消した。僅かそうしたことすら彼には習慣的な反対——崖からの瞰下景かんかけいに起ったであろう一つの変化がちらと心を掠かすめるのであった。部屋が暗くなると夜気が殊更ことさら涼しくなった。崖路の闇もはつきりして来た。しかしそ

のなかには依然として何の人影も立ってはいなかった。

彼にただ一つの残っている空想というのは、彼がその寡婦<sup>かふ</sup>と寢床を共にしているとき、不意に起って来る、部屋部の窓を明け放してしまうという空想であつた。勿論彼はそのとき、誰かがその崖路に立っていて、彼等の窓を眺め、彼等の姿を認めて、どんなにか刺戟を感じるであらうことを想い、その刺戟を通して、何の感動もない彼等の現実にもある陶醉が起って来るだろうことを予想しているのであつた。しかし彼にはただ窓を明け崖路へ彼等の姿を晒<sup>さら</sup>すということばかりでも既に新鮮な魅力で

あつた。彼はそのときの、薄い刃物で背を撫なでられるよ  
うな戦慄せんりつを空想した。そればかりではない。それがいか  
に彼等の醜い現実に対する反逆であるかを想像するので  
あつた。

「一体俺は今夜あの男をどうする積りだつたんだらう」  
生島は崖路の闇のなかに不知不識自分の眼の待ってい  
たものがその青年の姿であつたことに気がつくど、ふと  
醒さめた自分に立ち返つた。

「俺ははじめあの男に対する好意に溢あふれていた。それで  
窓の話などを持ち出して話し合う気になつたのだ。それ

だのに今自分にあの男を自分の欲望の傀儡かいらいにしようと思  
っていたような気がしてならないのは何故だろう。自分  
は自分の愛するものは他人も愛するにちがいないという  
好意に満ちた考えで話をしていたと思っていた。しかし  
その少し強制がましい調子のなかには、自分の持ってい  
る欲望を、云わば相手の身体にこすりつけて、自分と同  
じような人間を製造しようとしていたようなところが不  
知不識にあつたらしい気がする。そして今自分の待って  
いたものは、そんな欲望に刺戟されて崖路へあがって来  
るあの男であり、自分の空想していたことは自分達の醜

い現実の窓を開けて崖上の路へ曝さらすことだったのだ。俺の秘密な心のなかだけの空想が俺自身には関係なく、ひとりでの意志で著ちやくちやく々と計画を進めてゆくというような、一体そんなことがあり得ることだろうか。それともこんな反省すらもちやんと予定の仕組で、今若しあの男の影があすこへあらわれたら、さあいよいよと舌を出す積りにしていたのではなからうか……」

生島はだんだんもつれて来る頭を振るようにして電燈を点ともし、寢床を延べにかかった。

## 3

石田（これは聴き手であつた方の青年）はある晩のこ  
とその崖路の方へ散歩の足を向けた。彼は平常歩いてい  
た往来から教えられたはじめての路へ足を踏み入れたと  
き、一体こんなところが自分の家の近所にあつたのかと  
不思議な気がした。元来その辺はむやみに坂の多い、丘  
陵と谷とに富んだ地勢であつた。町の高みには皇族や華  
族の邸に並んで、立派な門構えの家が、夜になると古風

な瓦斯燈ガスとうの点つく静かな道を挟はさんで立ち並んでいた。深い樹立こだちのなかには教会の尖塔せんとうが聳そびえていたり、外国の公使館の旗がヴィラ風な屋根の上にひるがえっていたりするのが見えた。しかしその谷に当たったところには陰気なじめじめした家が、普通の通行人のための路ではないような隘路あいろをかくして、朽ちてゆくばかりの存在を続けているのだった。

石田はその路を通ってゆくとき、誰かに咎とがめられはしないかというようなうしろめたさを感じた。なぜなら、その路へは大っぴらに通るすがりの家が窓を開いている

のだった。そのなかには肌脱ぎになった人がいたり、柱時計が鳴っていたり、味気ない生活が蚊遣かやりを燻いぶしたりしていた。そのうえ、軒燈にはきまつたようにやもりがとまっていた彼を気味悪がらせた。彼は何度も袋路に突きあたりながら、——その度になおさら自分の足音にうしろめたさを感じながら、やっと崖に沿った路へ出た。しばらくくゆくとな家が絶えて路が暗くなり、僅かに一つの電燈が足許あしもとを照らしている、それが教えられた場所であるらしいところへやって来た。

其処からはなるほど崖下の町が一と目に見渡せた。い



くつもの窓が見えた。そしてそれは彼の知っている町の、思いがけない瞰下景であった。彼はかすかな旅情らしいものが、濃くあたりに漂っているあわちのぎくの匂に混って、自分の心を染めているのを感じた。

ある窓では運動シャツを着た男がミシンを踏んでいた。屋根の上の闇のなかにたくさんの洗濯物らしいものが灰白く浮かんでいるのを見ると、それは洗濯屋の家らしく思われるのだった。またある一つの窓ではレシーヴァを耳に当てて一心にラジオを聴いている人の姿が見えた。その一心な姿を見ると、彼自身の耳の中でもそ

のラジオの小さい音がきこえて来るようにさえ思われるのだった。

彼が先の夜、酔っていた青年に向かって、窓のなか立ったり坐ったりしている人びとの姿が、みななにかはかない運命を背負って浮世に生きていように見えるように見えると云ったのは、彼が心に次のような情景を浮かべていたからだった。

それは彼の田舎いなかの家の前を通っている街道に一つ見窄みすぼらしい商人宿があつて、その二階の手摺てすりの向こうに、よく朝など出立の前の朝餉あさげを食べていたりする旅人の姿が

街道から見えるのだった。彼はなぜかそのなかである一つの情景をはっきり心にとめていた。それは一人の五十年代の男が、顔色の悪い四つくらいの男の児と向い合つて、その朝餉の膳ぜんに向つてゐるありさまだった。その男の顔には浮世の苦勞が陰鬱に刻まれていた。彼は一言も物を言わずに箸を動かしていた。そしてその顔色の悪い子供も黙つて、馴れない手つきで茶碗をかきこんでいたのである。彼はそれを見ながら、落魄らくはくした男の姿を感じた。その男の子供に対する愛を感じた。そしてその子供が幼い心にも、彼等の諦めなければならぬ運命の

ことを知っているような気がしてならなかった。部屋のなかには新聞の附録のようなものが襖ふすまの破れの上に貼つてあるのなどが見えた。

それは彼が休暇に田舎へ帰っていたある朝の記憶であった。彼はそのとき自分が危く涙を落しそうになったのを覚えていた。そして今も彼はその記憶を心の底に蘇よみがえらせながら、眼の下の町を眺めていた。

殊に彼にそう云う気持を起させたのは、一棟むねの長屋の窓であった。ある窓のなかには古ぼけた蚊帳かやがかかっていた。その隣の窓では一人の男がぼんやり手摺から身体

を乗出していた。そのまた隣の、一番よく見える窓のな  
かには、箆たんす笥などに並んで燈明の灯ともった仏壇が壁ぎわに  
立っているのであった。石田にはそれらの部屋を区切っ  
ている壁というものがはかなく悲しく見えた。若し其処  
に住んでいる人の誰かがこの崖上へ来てそれらの壁を眺  
めたら、どんなにか自分等の安んじている家庭という観  
念を脆もろくはかなく思うだろうと、そんなことが思われた。  
一方には闇のなかに際立って明るく照らされた一つの  
窓が開いていた。そのなかには一人の禿はげあたま 顱の老人が煙  
草盆を前にして客のような男と向い合っているのが見え

た。暫くそこを見ていると、そこが階段の上り口になっているらしい部屋の隅から、日本髪に頭を結った女が飲みもののようなものを盆に載せながらあらわれて来た。するとその部屋と崖との間の空間が俄かに一揺れ揺れた。それは女の姿がその明るい電灯の光を突然遮さへぎったためだった。女が坐って盆をすすめると客のような男がぺこぺこ頭を下げているのが見えた。

石田はなにか芝居でも見ているような気でその窓を眺めていたが、彼の心には先の夜の青年の云った言葉が不知不識の間に浮かんでいた。——だんだん人の秘密を盗

み見するという気持が意識されて来る。それから秘密の中でもベッドシーンの秘密が捜したくなつて来る。――

「或いはそうかもしれない」と彼は思った。「しかし、今の自分の眼の前でそんな窓が開いていたら、自分はその男のような欲情を感じるよりも、寧ろものむしのあわれと云った感情をそのなかに感じるのではなからうか」

そして彼は崖下に見えるとその男の云ったそれらしい窓を暫く捜したが、何処にもそんな窓はないのであった。そして彼はまた暫くすると路を崖下の町へ歩きはじめた。

## 4

「今晚も来ている」と生島は崖下の部屋から崖路の闇のなかに浮かんだ人影を眺めてそう思った。彼は幾晩もその人影を認めた。その度に彼はそれがカフェで話し合った青年によもやちがいが無いだろうと思い、自分の心に企たくらんでいる空想に、その度戦慄たびせんりつを感じた。

「あれは俺の空想が立たせた人影だ。俺と同じ欲望で崖の上へ立つようになった俺の二重人格だ。俺がこうして



俺の二重人格を俺の好んで立つ場所に眺めているという空想はなんという暗い魅惑だろう。俺の欲望はとうとう俺から分離した。あとはこの部屋に戦慄と恍惚があるばかりだ」

ある晩のこと、石田はそれが幾晩目かの崖の上へ立って下の町を眺めていた。

彼の眺めていたのは一棟の産科婦人科の病院の窓であった。それは病院と云っても決して立派な建物ではなく、昼になると「妊婦にんぶ預ります」という看板が屋根の上へ張

出されている粗末な洋風家屋であった。十ほどあるその窓のあるものは明るくあるものは暗く閉ざされている。漏斗型じょうごに電燈の被おほいが部屋のなかの明暗を区切っているような窓もあった。

石田はそのなかに一つの窓が、寝台を取り囲んで数人の人が立っている情景を解放しているのに眼が惹ひかれた。こんな晩に手術でもしているのだろうかと思った。しかしその人達はそれらしく動きまわる気配もなく依然として寝台のぐるりに凝立していた。

暫く見ていた後、彼はまた眼を転じてほかの窓を眺め

はじめた。洗濯屋の二階には今晚はミシンを踏んでいる男の姿が見えなかった。やはりたくさんの洗濯物が灰白く闇のなかに干されていた。大抵の窓はいつも晩とかわらずに開いていた。カフェで会った男の云っていたような窓は相不変あいかわらず見えなかった。石田はやはり心のどこかでそんな窓を見たい欲望を感じていた。それはあらわなものではなかったが、彼が幾晩も来るのにはいくらかそんな気持も混じっているのだった。

彼が何気なくある崖下に近い窓のなかを眺めたとき、彼は一つの予感でぎくつとした。そしてそれがまごう方

なく自分の秘かに欲していた情景であることを知ったとき、彼の心臓は俄かに鼓動を増した。彼はじっと見えていられないような気持で度々眼を外そらせた。そしてそんな彼の眼がふと先程の病院へ向いたとき、彼はまた異様なことに眼を瞠みはった。それは寝台のぐるりに立ちめぐって来た先程の人びとの姿が、ある瞬間一度に動いたことであつた。それはなにか驚愕きょうがくのような身振に見えた。すると洋服を着た一人の男が人びとに頭を下げたのが見えた。石田はそこに起つたことが一人の人間の死を意味していることを直感した。彼の心は一時に鋭い衝撃をうけ

た。そして彼の眼が再び崖下の窓へ帰ったとき、そこにあるものはやはり元のままの姿であったが、彼の心は再び元のようではなかった。

それは人間のそうした喜びや悲しみを絶したある厳粛な感情であった。彼が感じるだろうと思っていた「もののあわれ」というような気持を超こした、ある意力のある無常感であった。彼は古代の希臘ギリシヤの風習を心のなかに思い出していた。死者を納いれる石棺のおもてへ、淫みだらな戯れをしている人の姿や、牝羊と交合している牧羊神を彫りつけたりした希臘人の風習を。——そして思った。

「彼等は知らない。病院の窓の人びとは、崖下の窓を。崖下の窓の人びとは、病院の窓を。そして崖の上にこんな感情のあることを——」

——一九二八年六月——







日本文学電子図書館

---

檸檬

著者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

昭和44年8月20日 4刷

---

日本文学電子図書館